

『自由・自律の精神』を育てる学校づくりを目指そう

日本個性化教育学会 会長 加藤幸次

一般的に、研究会の寿命は30年と言われて
います。研究会を構成する人々の活躍や研究会
が目指す目標は「一世代」といったところでし
ょうか。しかし、私たちの学会は、かれこれ、
50年にもなるのです。しかも、このところ、
再び、新しい展開を始めているのです。このこ
と自体、素晴らしいことですし、私たちの研究
会が目指す目標が、まさに、根源的、本質的
ということではないでしょうか。

1984年に「全国個別化教育連盟」として、
板橋区の金沢小学校で大会を開き、この研究会
は発足しました。当時、全国にばらばらと、3
0近くの多目的（オープン）スペースをもった
小学校が造られたころでした。板橋区はその先
端を切り開いた教育委員会でした。同年、文部
省が多目的スペースを増設することに補助金
を与えることになり、急速に、学校が増えてき
ました。

この動きは20世紀初頭に始まる新教育、す
なわち、児童中心主義教育という世界的な視野
の中で展開されてきているものです。1968
年に公表されたプラウデン報告書によって広く
知られるようになったのですが、多目的スペ
ースを持った学校は戦後のイギリスで作り始め
られ、そこでは、形式にとらわれないインフォ
ーマル教育が展開されたのです。直ちに、アメリ

かに広がり、ヨーロッパ諸国や日本にも、持ち
込まれたのです。

日本の「個性化教育」を目指す学校教育改革
の出発点を、いわゆる大正自由教育の実践に、
あるいは、1941年に出された『新教育指針』
や1971年の『四六答申』に求めることもで
きるのですが、やはり、1984年、臨時教育
審議会が最終答申で示した「個性の尊重」とい
う方針にあると言っていいでしょう。そこでは、
次のように言われています。「従来の教育にお
いては、個人の尊厳、個性の尊重、自主的精神
の涵養が必ずしも十分ではなく、個の確立、自
由の精神の尊重等に欠けているところがあった
ことを反省し、これからの教育は、『自由・自
律の精神』、すなわち、自ら思考し、判断し、
決断し、責任を取ることのできる主体的能力、
意欲、態度等を育成しなければならない」と。
この答申を受けて、1988年、私たちの研究
会は「全国個性化教育連盟」と改称し、さらに、
2008年、「日本個性化教育学会」とし、研
究紀要と研究大会を持つ学会にアップグレード
しました。

今後、私たちは活発な学会活動を通して、こ
の崇高な理念を引き継ぎ、「個人の尊厳、個性
の尊重、自主的精神の涵養」を目指した学校づ
くりを励んでいきたいものと希望しています。